

## ボルネオ島のカリスにおける災いの説明と災いへの対処

— 民俗知識としてのカタペアン —

### I はじめに

カリス (Kalis) 人は、インドネシア・西カリマンタン州カプアス河上流の支流マンダイ (Manday) 川に注ぎ込むカリス川流域に住む人口二千人弱の人々である。彼らは、ダヤク (Dayak) 諸族と呼ばれるボルネオ島の非イスラーム系先住民の一族集団である。カリスの口頭伝承によると、「ルックの人々 (urang Ruk)」と呼ばれる一団が、澄明な川を発見してカリス (澄んだという意) と名づけ、その川の流域に住むようになった。爾来、彼らは周辺の人々からカリス人と呼ばれるようになった。カリス人は、川沿いの沖積地の森を切り開いて、焼畑農耕によって生計を立ててきた。現在、陸稲の他に

### 奥野克巳

とうもろこし、南京豆、インゲン豆、ニガウリなどが栽培され、森の中のドゥリアン、ランブータン、バナナなどは換金用として集められて近くのマーケットに売られる。

カリスの親族組織は双系的 (Bilateral) である。かつては三つの社会階層を有していたが、現在ではそれは機能をほぼ完全に失っている。旧来の居住形態であるロングハウスは一九五〇年代から徐々に遺棄され、カリス川流域には一九九五年現在一つのロングハウスが残るだけである。カリス人に隣接して、同じくダヤク諸族に属するスルク (Suluk) 人とラウー (Lauh) 人がいる。カリス川の下流域にはイスラーム系住民であるマレー (Malay) 人の農村がある。カリス川地域のリンガ・フ

ランカはマレー語(カプアス河上流方言)で、カリスの多くは、カリス語の他にマレー語を操ることができる。

カリス社会においては、病気や死、怪我などの何らかの災いが生じた時、人々は、その災いを被った本人がカタペアン(Katabean)であったという語り方をする場合が頻々とある。また、提供された食べ物や飲み物を欲しくなかったり、摂るのを控えたりする時には、カタペアンにならないために、すなわち、災いを被らないために、それを僅かだけでも口にしなければならぬ、あるいは、特定の言葉を発してそれに軽く触れなければならないなどの作法がある。このことから、カタペアンは、カリス社会において、病気、死、怪我などの災いを説明するために、かつ、災いに対処するために、先祖代々受け継がれてきた民俗知識であると言うことができ。小論の目的は、カリスのカタペアンを、災いを説明する際の推論のための形式、および、災いに対処する際の行為のための形式を含む知識と捉えることによって、その輪郭を描き出すことである。

## II カタペアンについての調査経験から

カリス社会でフィールドワークを始めてから、筆者が最初に一番多く耳にした言葉がカタペアンであった。村の中を歩いていると、大抵どこかの家からちょっと家が上がって行けと声がかかる。家が上がり込むと、必ずと言っていいほどヤシ酒(tuak)、米酒(seram)、コーヒー(Kopi)などが振る舞われる。それがカリス流の歓待の方法である。その時、今しがた飲んだばかりだとか、胃腸の調子がよくないなどの理由で、出された飲み物を飲みたくないなら、コップを単に突き返すだけでは許されない。しかしかの理由でいらぬと言っても、なお少しだけでも飲むように薦められることが多い。その時いらぬと言ったら、その場の誰かが「カタペアンの」と命令口調で語尾を上げて言うかもしれない。これは出された飲み物を皆で飲みましょうという合図であると同時に、飲み物を目の前にして放っておくとその人がカタペアンになることを危惧して発せられる親切の言葉でもある。そう言われた場合、一口二口その出された飲み物を啜るだけでよい。しかし、そう言われてもなお

飲む気がなかったり、飲んではいけない何らかの理由(例えば、ドクターストップがかかっているなど)があるなら「タバアイ (tabai) / マナビアイ (manabai)」するように、すなわち、コップに軽く右手指で触れるように命じられる。より正確に言えば、出された飲み物を摂らない人は「私を解き放っておくれ! (palapas ku)」と呟いて、右手指をそっとコップに触れてから、素早くそれを胸にあてる動作を行なう。カリス社会においては、このような行為がかなり高い蓋然性をもって行なわれている。そして、それは、カタペアアンになると、病気や死に見舞われたり、蛇やムカデなどの小動物に襲われたりするのを回避するために行なわれるのだと、大抵の場合は説明される。

筆者は、このようなカリスの日常的行為とそれに対する注釈に何度も出くわし、かつ自らもその行為を実践するに従い、カタペアアンに対する幾つかの疑問を持つようになつた。それは、「出された食べ物や飲み物を摂らなかつたり、摂らないことに対して適切な処置をしなかつたら、なぜカタペアアンになるのか?」「カタペアアンになると、なぜ病気になつたり、死んだり、蛇やムカ

デに噛まれるのか?」という類の問いである。これらの問いを小論では、便宜的にカタペアアンに対する「なぜ」の問いと呼んでおく。

当初筆者には、この問いを解決するためには当事者に直接訊ねることが有効であるように思われた。事ある毎にカリスの人々に、カタペアアンに対する「なぜ」の問いを投げかけてみたが、この問いに適確に答えられるカリスにはめぐり合えなかつた。返答は、食べ物や飲み物を出されて欲しくない時、何らかの理由で摂ることができない時には、それに軽く触れて「私を解き放っておくれ!」と呟かなければならないし、そうしなければ、病気になつたり、蛇やムカデに噛まれるというすでに分かっていた要点を繰り返すものであつた。筆者がそれでも執拗に「なぜ」の問いを発し続けると、そんなにカタペアアンについて知りたいのであれば、カタペアアンの病気の治療を行なうバリアン (balian) に聞けばいいと進言してくれる人がいた。

説明してくれと言う筆者の求めに応じて、ある女性バリアンは、人間はアントゥ (antu) と総称される霊的存在に通常怖がられているが、カタペアアンになると人

間がアントゥにとって「動物」に見え、人間の靈魂(sumangat)がアントゥに攻撃されるのだと説明してくれた。つまり、アントゥはカタベアアンで「動物」に見えるようになった人間の靈魂を襲うので、人間の靈魂が弱体化して、病気になるというのである。さらに、別の男性バリアンは、カタベアアンになると人間がアントゥから見て攻撃すべき「アントゥ」に見えるのだと説明してくれた。

カタベアアンになると人間の靈魂が「動物」や「アントゥ」に見えて攻撃されることで、弱体化し、その結果人間が病気になるというそれらの説明は、筆者を一時的に納得させることができた。ところが、このような論理だと、今度は、カタベアアンになることで人間が蛇やムカデなどの動物に襲われるプロセスに、アントゥがどのように関わっているのが平明ではない。すなわち、アントゥが小動物に命じて人間を襲わせるのか、あるいは、アントゥが小動物に変身して人間を襲うのか。また、病気の場合は、アントゥは人間の靈魂を攻撃したのに、怪我の場合、仮にアントゥが小動物に変身したとすると、小動物は人間の靈魂ではなくて、直接的に身体を攻撃目

標とするのか。これらの問いに、バリアンは明確な答えを用意していないように思えた。また、カタベアアンが「なぜ」出された食べ物や飲み物を摂らないことと関係するのかと尋ねると、バリアンも含めてカリスの人々は「知らない(Dea ngata'uang)」と言って、一様に口を噤んでしまうのである。このようにして、カタベアアンに対する「なぜ」の問いを当事者に浴びせ掛け、その現象自体を説明しようとする企ては、この時点で大きな壁にぶちあたることになる。

同じような壁にぶちあたったメトカーフ(Metcalfe)の議論が、この場合、示唆に富んでいる。彼は、サラワクのプラワン(Berawan)社会において、死の直後に野辺の歌が唱えられ、その何ヶ月後かに行なわれる死者の二次埋葬の折にも再び野辺の歌が唱えられること、すなわち、同一の死者に対して「死の旅」が二回行なわれることに対して疑問を持った。彼は自らが抱いたその不整合性を説明するようにインフォーマントにうるさくせがんだが、「私は彼らがうまく説明できないのを知って驚いた。彼らはぼかんとしているだけで、分かりきったことの要点を繰り返すのだった」(Metcalfe 1976: 85)

と言う。しかし、長い間あたりを徘徊してきてまだ死者の世界に迎え入れられていないままの死者の靈魂が、二次埋葬の儀礼で呼び出されて、死の世界へと正當的に案内されると言う説明を、メトカーフはついに年配の男性から手に入れた。その説明は一見彼の抱く疑問を取り除いて、事のなりゆきを整合的に説明しているかのように思えた。ところが、自己の調査経験を顧みることによって、ついにメトカーフはそれが対象社会の人々によって人類学者のために工夫された説明だったことに気づく。

「私のためにつくりだされた合理的説明は、ブラワンの一般的イデオロギーを表現していないことが明らかになった。ほとんどのブラワンは私を悩ましたような問題を決して考えたりしないのである」(ibid: 86)とメトカーフは述べている。

メトカーフの所見に照らせば、カリス人は筆者を悩ましていたようなカタベアアンに対する「なぜ」の問いを深刻に考えたりしないのだと言える。カリス人が、カタベアアンとアントゥとの係わりを曖昧模糊としたメカニズムとして捉えていることは確かである。しかし、バリアンが筆者の執拗な問いかけに対して与えた解答は、筆

者の希望に沿うように工夫された説明であった可能性が強い。筆者が問わなければ、そのような問題は、バリアンによっても、それ以外の人々によっても追及して考えられるようなことはなかったのだと思われる。事実、筆者がバリアンからカタベアアンのメカニズムについて一定の解答を引き出し得たと考えたカリスの人々は、それ以後、今度は筆者からカタベアアンに対する「なぜ」の問いの説明を熱心に聞こうとしたのである。

当事者からカタベアアンに対する「なぜ」の問いに対する答えを引き出そうとする試みの失敗は、そのような問いがカリス人の間で問われるものでないこと、すなわち、カリス人にとってカタベアアンがとりたてて説明の必要のないものとして考えられていることを明るみにしてくれる。浜本の議論を援用すれば、カリスは、カタベアアンそのものの「について」語ることはほとんどないのだと言える(浜本一九八九:六一)。むしろ、カリス人においては、病氣、死や怪我などの災いこそが、カタベアアン「によって」説明されることになる(ibid)。

この意味で、カタベアアンは、災いを説明するために使われる民俗知識である。「出された食べ物・飲み物を

摂らないか、摂らないことに対する適切な処置をしないと、(カタベアアンになり、その結果)病気や死、蛇やムカデなどの小動物に襲われて怪我をするなどの災いに見舞われる」というのが、カリス社会において共有されている、伝承されてきたカタベアアンの知識である(丸括弧内の語句が当事者において意識されるかどうかは文脈に依存している)。当事者は、この知識の細目「について」それ以上問うことはない。むしろ、彼らは、この知識「によって」、災いを説明するための推論をしたり、災いに対処するための行為を遂行する。

この観点を拠り所としつつ、次節では、カタベアアンを災いに説明を与える推論のための形式として捉え、具体的なたんたんの語りの中にその諸特徴を析出していこう。その後に、残された問題、すなわち、カリスの人々が出された食べ物・飲み物を摂らない時に行なう行為の意味を考えたい。

### III 災いの説明…推論のための形式

ある娘が亡くなった。遺体の埋葬後、親戚・関係者一同を集めて開かれた話し合(シオトアンの)の場面に

いて、死んだ娘の父親A氏(四十五歳)は、彼らの協力で葬儀が無事に終わったことに対して謝意を述べ、娘が嘔吐と下痢で死亡したことに言及した直後に「おそらく娘はカタベアアンだったのでしょう」という彼自身の推測を述べた。その後、以下のように続けた。

「亡くなる前に外出から戻った娘は玄関先で『もし我々が(出された)コーヒーを飲まなかったらカタベアアンになるのですか、お母さん』と尋ねたのです。母親は『そうですね』と答えました。しかし、彼女(娘)はそれ(コーヒー)をどこで見たのかについては言いませんでした……おそらくアントゥに食べられてしまったのです」

A氏によると、彼の娘は死の直前、出先から戻って母親に、出されたコーヒーを飲まなかったらカタベアアンになるのかどうかについて質問している。このことから、彼女は、どこかで出されたコーヒーを、見ただけで飲まなかったのです、カタベアアンになって、アントゥに食べられて死んでしまったというのが、A氏の見解である。

ここで重要なことは、A氏の発話において、娘が嘔吐と下痢という急性の消化器疾患によって亡くなったとい

う因果関係とは別に、娘が出されたコーヒーを飲まなかったのでアントゥに食べられて亡くなったというもう一つの因果関係が語られていることである。ここでは、嘔吐と下痢から死へという「目に見える」因果関係とは別に、A氏によって「目に見えない」とでも言うべき因果関係が想定され、語られていると言うことができる。<sup>(3)</sup>ここで言う「目に見えない」因果関係とは、(I)娘がコーヒーを出されたのだけれども飲まなかった(と推定される)出来事と、(II)その娘が亡くなったという出来事のそれである。

A氏は、(I)の出来事がカタベアンを引き起こして、(II)の災い(死)を帰結したかのように語っている。ところが、A氏の推論そのものは、実は、これとは全く逆の順序を辿っている。つまり、A氏は、(II)が起こった時点から、遡及的(retrospective)に(II)を(I)に結びつけたのである。

この場合、娘は嘔吐と下痢で死んだのだと言うだけでは、A氏にとって、また、カリスの人々にとって得心がいかなかったのだろうか？ 葬儀に参加した人々は、あらかじめ、嘔吐と下痢で少女が亡くなったと聞いた上で

列席した。そして、嘔吐と下痢でA氏の娘が亡くなったと聞くだけで何の不都合もないように思える。だとすると、A氏はこともあろうに自分の娘にだけ降りかかった災いをそのような事実関係だけで了解するわけにはいかなかったのかもしれない。

また、A氏は葬儀後の重要な話し合いの場で、娘が誰かに殺されたのではなくて、自らの過失から死を招いたと強調することで、起こりうる社会的な葛藤をあらかじめ封じ込めようとしたのだろうか？<sup>(4)</sup> A氏の家族の周りには社会的な緊張関係は起こりそうになかった。それゆえ、A氏の発言は、この場合、社会的な緊張関係を前もって封じるためのものではなかったようである。

A氏は、周りの人々から娘の生前の言動を聞き知るに及んで、本来は別々に起こった二つの出来事(前述の(I)と(II))を結びつける可能性に気づいたのであろうと思われる。カタベアンのすなわち、出された食べ物・飲み物を摂らないことが災いをもたらすという知識が、このようなA氏の推論を可能にしたのである。A氏は、娘の死を嘔吐と下痢の原因とする因果関係の枠組みにおいて捉えると同時に、出されたコーヒーを飲まなか

ったことを気に病んでいた娘の生前の語りに照らして、娘の死を、出されたコーヒーを飲まなかったことに結びつけて理解しようとしたのである。

ところで、A氏の語りにおいて、カタベアアンこそが娘の死の原因であるかのごとく語られている。「おそらく娘はカタベアアンだったのでしょ」とA氏は言う。恰もカタベアアンという状態が、死に先行してあって、当の死を引き起こしたかのように語られるのである。ここで見たように、カタベアアンは、災いの出来事と、出された食べ物・飲み物を摂らなかつた、あるいは摂らないことに対する適切な処置をしなかつた出来事と結びつけるための知識であるにも拘らず、カタベアアンこそが当の死を引き起こしたかのように語られ、語られることによってそのことが現実として経験されるようになるというのが、カタベアアンをめぐる語りの特徴である。

以下は、カタベアアンの経験について語ってほしいという筆者の要請に応えてB氏(男性、五十歳)によって語られたものである。

「ある日私が森の中に入っていくと蛇に出くわしたの

です。その蛇が逃げようとしたので、私は近道を通って待ち伏せたのです。その蛇は頭をもたげて液を吹き掛けて来ました。私の目はまるで赤唐辛子でこすったかのようになり痛みました。家に帰って来ると、以前中国人がそう言っていたので、人工調味料(micin)を塗り付けました。そのことがある前に、私は隣人からドゥリアンをももらったのですが、食べている暇がありませんでした。おそらく私は、そのドゥリアンからのカタベアアンだったので「す」

この語りにおいても、本来別々の二つの出来事が結びつけられている。それは、(I)「私は隣人からドゥリアンをももらったのですが、食べている暇がありませんでした」という出来事と、(II)「私の目はまるで赤唐辛子でこすったかのように痛みました」という災いの出来事である。この場合、B氏も明言しているように、目が痛んだことの直接的な原因は、あくまでも「蛇は頭をもたげて液を吹きかけて来ました」という出来事である。つまり、ここでも、蛇が液を吹きかけて目を傷めたという因果関係とは別に、もらったドゥリアンを食べないで放っておいたので、カタベアアンになって、蛇に襲われて目



を傷めたという因果関係において、災いが語られている。まさか、それらが、B氏において、近因と遠因という二つの原因として考えられているのではないだろう。

小動物に襲われたことに起因する災いは、出された食べ物・飲み物を摂らなかつたことに結びつけられる傾向にあるというカタベアアンの知識が、このようなB氏の推論を促すことになったのだと言える。B氏は、(Ⅱ)目が痛くなった時点で、その痛みを、遡及的に(Ⅰ)もらつたドゥリアンを口にしなかつたという出来事に結びつけた。B氏は、蛇に襲われて目を傷めたということをお忘れたわけではないのだが、この因果関係による説明を唯一の可能な災いの説明として提示しようとする。

フィールドワーク期間中、筆者は、自らカタベアアンになつてアントゥに出会つたという人の話をよく耳にした。以下のやり取りは、その話の現存する主人公C氏(男性、五十五歳)に事情を聞いた時のものである。

「私は意識的にカタベアアンになつたのです。彼ら(ⅡC氏の家族)がアントゥを見たがつたのです。『あなた方が出作り小屋で待つなら見せてあげましょう』と私

は言いました。私は彼らが(家に)帰ってしまつてからアントゥに群がられたのです……アントゥ・アナック(antu anak)で、子どもの大ききで、男と女もいました……『あなたは(カタベアアンになつて)我々を呼び出して欲しいどうするつもりなの?』と彼ら(Ⅱアントゥ・アナック)は言いました。私は『家族があなた方を見たかつたのですが、もう(家に)帰ってしまひました』と言いました。『そんなことをすれば)あなたが食べられるのだよ、意味なく我々を呼び出したりして』と。私は『もし(私を)食べるなら食べておくれ、私はもう年老いているので』と言つたのです」

カタベアアンの知識において、カタベアアンになるとアントゥが現れて人間の靈魂を攻撃するのだとすれば、アントゥに会うためにカタベアアンになるという方法が考え出されたとしても不思議ではない。家人にアントゥを見せてあげようとして、勇敢にもC氏はこのことを実践した。それが、ここでC氏の言う「私は意識的にカタベアアンになつたのです」の意味である。C氏は、食べ物・飲み物を前にして摂らないか、適切な処置を行なわないこと(そのどちらかはこの語りからは不明)カタ

ペアアンになり、念願叶ってアントゥに出会ったのだけれども、会うだけではなく、それらに「食べられ」そうになったと言うのである。そして、すでにその時には家族は家に帰ってしまった。アントゥ・アナックとは、出産に臨んで死んだ母親、あるいは子どもの死霊で、爪が長く、壁を掻き穿るのを好むとされる。

実は、C氏のアントゥとの遭遇の話は、C氏が、焼畑の出作り小屋に一人で寝泊まりしていた晩に高熱を出して、翌朝家族に担ぎ出されたという災いの出来事に端を発したものである。C氏の家族は、前日にC氏が意識的にカタペアアンになろうとした出来事を憶い出した。ここでは、(Ⅰ)C氏が意識的にカタペアアンになろうとしたことと、(Ⅱ)C氏の発熱という二つの別々の出来事が結びつけられている。(Ⅱ)C氏が発熱した時点で、その発熱が、家人によって適時的に、(Ⅰ)C氏が意識的にカタペアアンになろうとした出来事に結びつけられたことが、広く流布している人間とアントゥとの遭遇の逸話の起源であると考えられる。

本節ではカタペアアンを、災いを説明するための推論

形式として論じてきた。要点をまとめておこう。カリスの人々は、(Ⅰ)「出された食べ物・飲み物を摂らなかつた、あるいは、摂らないことに対する適切な処置をしなかつた出来事」と、(Ⅱ)「病氣、死、怪我などの災いの出来事」を、災いが起きた時点で相互に結びつけようとする。両者を結びつけるのが知識としてのカタペアアンであるにも拘らず、カリスの当事者においては、カタペアアンこそが災いを引き起こしたのだと語られ、かつそのことによってカタペアアンをめぐる因果関係が現実のものとして経験されることになる。

#### Ⅳ 災いへの対処・行為のための形式

今しがた見たC氏の経験は、カタペアアンが推論のための形式だけに限られるものではないことを示唆してくれる。C氏が意識的にカタペアアンになったことは、彼がカタペアアンにならないために規範化されている行為を意図的に行なわなかつたことを意味している。このことから、カリス社会では、カタペアアンにならないための一定の作法が伝承されていることが分かる。言い換えれば、カリスのカタペアアンは、災いが起きた時点で、

遡及的に、当の災いを、出された食べ物・飲み物を摂らなかつた、あるいは、摂らないことに対する適切な処置をしなかつた出来事に結びつけることで災いの物語が成立することを大前提として、災いの物語の成立を未然に防ぐことを企図して行なわれる行為のための形式を持っている。Ⅱ節の冒頭で、粗削りに描き出された、出された飲み物に対するカリスの人々の日常的な振る舞いがこれに相当する。

カタベアアンは、言わば、災いが将来的 (Prospectiv) に語られることがないことを祈念して行なわれる行為形式を備えていることになる。カリスの当事者においては、出された食べ物・飲み物を僅かでもいいから摂る、あるいはそれに適切な処置をするという行為は、「災いの物語が成立するのを防ぐ」のではなくて、「災いが起きるのを防ぐ」ために日常生活の中で反復的に行なわれる。以下では、カタベアアンをめぐる行為形式について、筆者が観察し得た範囲内で描写してみよう。

それは、筆者が、D氏(男性、六十歳)の焼畑に火入れを観察しに行った日の何気ない出来事である。D氏は、出作り小屋の傍らで尻尾を振っている黒い飼犬の存在

に気づいた。彼は出作り小屋から昼飯の残りの米飯の入った飯盒を取り出して、その飯盒を左手で持つとそれに軽く右手を触れ、その右手を素早く胸にあてて「私を解き放っておくれ!」と唱えた。今度は、筆者にその飯盒を差し出しながら、「カタベアアン」と語尾を幾分あげながら囁いた。筆者も彼の行いをそのまま模倣した。その直後、D氏はその残飯を、鷲づかみにして皿の上に取り出し、犬に餌として与えた。この行為によって、我々二人は、将来的に災いの物語が成立するのを未然に防ぐことになる。我々二人の経験としては、災いが起きるのを防いだと言う方がより実情に近い。このようにカタベアアンをめぐる行為形式は、人間の食べる物・飲む物だけでなく、飼育動物(犬、猫、豚など)の餌に対しても適切な処置をすることを要求する。餌、あるいは餌の入った容器に軽く触れて、おきまりの言葉を発しなければならぬのである。

さらに、災いが起きるのを防ぐために、カリスの人々は食べ物・飲み物に対してハイパーセンシティブな対応を生み出してきた。年寄りの女性の多くは、道を歩いている時に、通りすがりの家の中から料理や食事の匂いが

ただけで「私を解き放っておくれ!」と呟いて、右手を胸に持っていく。また、ある半盲の女性は、日常会話の中で、自分であれ他の人であれ、食べ物や飲み物に関する言葉(例えば、ご飯やコーヒー)を発した時にはつねに、「私を解き放っておくれ!」と呟いて、右手を胸に持っていく所作を行っていた。このことによって、彼女たちは、少なくとも彼女たちの経験としては、災い起きるのを未然に防いだことになる。

それでは、食べ物や飲み物が出された場から離れて、食べ物・飲み物に対する適切な処置をしなかったことに気づいた場合はどうするのか? 後に災いが降りかかるかもしれないのだから、カリスにとって、そのことは大ごとであるはずだ。カリスは、そのことを、後から気づいた時は、その場で自分の目と口に右手指を軽く触れるという行為でもってその解決としておくようである。そのことで、「そのものを見て、かつ食べた(飲んだ)」こととして、災い起きるのを防ごうとする。筆者は、たった一度だけ、ある男性と森の中の道を歩いている時に、彼がこのことをするのを目撃したことがある。

また、カリス人の村を取り巻く森の中にはたくさん

邪悪なアントゥ(antujat)が潜んでおり、それらが、食べ物・飲み物に関する「言葉」を聞いただけでも過剰反応して、言葉を発しただけで摂取しなかった人間の靈魂を攻撃してくるかもしれないので、カリスは特に森の中で用いる食べ物・飲み物の語彙を発することには慎重である。そして、特に森の中で使う日常語以外の語彙群を発達させてきた。例えば、日常語の「食べる(kan)」[「煮飯を炊く(masak dakan)」「卵(talor)」「コーヒー(kopi)』は、森の中では、それぞれ「(鶏が)つつく(manotok)」「熊の頭を焼く(manutungi ulu baruang)」「地面の石(Datu tana)」「灰の水(ae para)」という、食べることや飲むことに関係のない言葉に置き換えられなければならないとされる。

カタペアアンは、推論のための形式だけに留まらず、災いの出来事が将来的に語られることがないために、すなわち、災い起きないために行なわれる行為形式を備えていることが本節の議論から明らかになった。ところが、出された食べ物・飲み物を損らな場合、適切な処置をしなければならないという作法の遂行に、人々がど

れだけ留意していたにせよ、どこかでこの作法の完遂を怠ってないとは限らない。食べ物・飲み物の名前が唱えられるか、匂いがただだけでも、「私を解き放っておくれ！」と唱えて適切な処置を心掛けている人が、是が非でもそうしなければならぬのだと言ひ張るならば、日常的に様々な作業に忙しく従事している人が、この幾分過剰ぎみの作法をそのつど成し遂げることは事実上無理であると言わねばならない。従って、カタペアアンにならないためのあらかじめの行為の形式があるにも拘らず、災いが生じた時点で、出された食べ物・飲み物に対して適切な処置をしなかったという事実を捜し出すことはそんなに難しいことではない。かくして災いは、カタペアアンという知識を通じて、組織されることになる。

## V むすび

今朝、私は出がけに、急に脇道から飛び出して来た通学中の中学生の自転車とぶつかって怪我をした。それは、全く思いがけないアクシデントによって起きた怪我だった。後から気がついたのだが、私は、この何年かの間大切に身につけていたお守りを、今朝に限ってなぜかつけ

忘れていた。それならば、その間、お守りの本体である「守護神」なるものが私から離れてしまっていて、不慮の事故に会ったのだと考えることによって、お守りをその時に限ってつけていなかったという出来事と、怪我をしたという災いの出来事との辻褄が合う。私は、決して、自転車にぶつけられたことで怪我したことを忘れては、自転車にぶつけられたことで怪我したことを忘れては、今度はそのお守りがきわめて重要な意味を持つものとして再認識されることになる。次にどこかに旅行に出かけたり、大切な物件で外出する時には、そのお守りを身体から決して離さないように細心の注意を傾けるだろう。

カタペアアンをめぐるカリスの人々の経験も、実は、これと極めてよく似ている。その時に、その場所ですべてその人が、蛇やムカデに襲われて怪我をするのは偶然であるのだが、同時に、それは当事者にとっては不可解な出来事でもある。私がお守りをつけ忘れていたことを憶い出したように、カリスは、出されたコーヒーに手をつけなかったことや、もらったドゥリアンを家の中に置きっ放しにしたままだったことなどを憶い出す。彼ら

にとつては、そのように考えることで、出来事の間辻褄が合う。この場合も、彼らは、嘔吐と下痢が死につながったことや、小動物に噛まれたことが怪我を引き起こしたことを決して忘れたわけではない。お守りが私個人の中で重要なものとして再認識されるようになったのに行ない、そこでは、食べ物や飲み物に関して適切な処置を行なうことが、カタベアアンという民俗知識に基づいて、あらかじめ社会全体で大きな関心事になっている。カリスは、身内や親しい間柄の人々に対しては、つねにカタベアアンにならないための適切な処置をするように勧告する用意がある。

小論では、災いが生じた時に、災いを説明する推論のための形式としてのカタベアアンを検討することから出発し、次に、カタベアアンが、災いに見舞われないための行為形式を豊富に発達させてきたことを論じてきた。災いの経験を組織するための推論と行為は人間にとつて普遍的な要素の一部であるが、それを支える知識が食べ物・飲み物に関わるという点で、カリスのカタベアアンはユニークである。

- (1) 小論で考察されるカリスのカタベアアンは、ボルネオ島・マレー半島の諸社会において広く行なわれてきた推論と行為の形式と、大小の差はあれ、共通の特徴を持つ。比較のため、民族名と名称/報告者(報告)を以下に列挙する。ボルネオ島のイバン人のフニ/エヴァンズ(Evans 1923)、ジェンセン(Jensen 1974)、内堀(一九九六)、陸ダヤク人のバヌン/ゲデス(Geddes 1957)、タマン人のカポナン/バースタイン(Bernstein 1991)、ムラトツス人のカプフン/ツィン(Tsing 1993)、ウンパロー人のカタベアン/アデラル(Adelaar 1995)、マレー半島のサカイ人、マレー人のクンプナン/エヴァンズ(Evans 1923)、セマイ人のフナン、プフナン/デンタン(Dentan 1968)、ロバーチェック(Robareck 1977)、チュウオン人のブネン/ハウウェル(Howell 1984)、トゥミアル人のバレンフッド/ローズマン(Roseman 1991)、スマッ・ブリ人のポーナン/口蔵(一九九六)。
- (2) カリスのバリアンは、人間の靈魂が身体(tilino)から遊離し、アントゥによって捕らえられていることによつて引き起こされる病気の平癒を目指す治療専門家である。一九九四―九五現在で、男性四人、女性六人、合計十人のカリス人のバリアンが現存していた。
- (3) A氏は「目に見えない」因果関係を提示することで、決して「目に見える」因果関係のことを忘れたわけではない。エヴァンズ＝ブリチャード(Evans-Pritchard)は、スーダンのアザンデ(Azande)社会において、病氣、死

怪我を含む災いの出来事が、ウィッチクラントに帰せられることと、自然的原因に帰せられることが区別されたわけではなからうことを指摘してゐる (Evans-Pritchard 1976 [1937]: 25)。

(4) カリス社会では、災いが、カタヌブマンを含むブントウのせいになされる場合と、人間によって仕掛けられる毒薬、呪具、邪術などのせいになされる場合がある。娘の死因が、後者に帰せられて、誰かに殺されたのだと仄めかされた場合、そこには社会的な緊張関係が発生する可能性がある。この問題については、ケニブのナン (Teso) 社会における、社会的な葛藤劇を視野に入れつつ、呪詛、邪術、死霊を中心的な災因として論じた長島の民族誌 (長島一九八七) が参考になる。

#### 参考文献

- sula. University Press.
- Evans-Pritchard, E. E. 1976 [1937]. *Witchcraft, Oracles, and Magic among the Azande*. Oxford University Press.
- Geddes, W. R., 1957. *Nine Dayak Nights: The Story of a Dayak Folk Hero*. Oxford University Press.
- 浜本満 一九八九 「不幸の出来事：不幸の語りにおける「原因」と「非・原因」』『異文化の解説』吉田禎浩 (編) 平凡出版社。
- Howell, S., 1984. *Society and Cosmos: Chewong of Peninsular Malaysia*. The University of Chicago Press.
- Jensen, E., 1974. *The Iban and Their Religion*. Clarendon Press.
- 蔵幸雄 一九九六 『吹矢と精霊』 東京大学出版会。
- Metcalf, P., 1976. 'The Berawan Afterlife: A Critique of Hertz' in *Studies in Borneo Societies: Social Process and Anthropological Explanation*, edited by Appell, G. N. pp. 72-91. Center for Southeast Asian Studies, North Illinois University.
- 長島信弘 一九八三 『死と病の民族誌：ケニブ・テソ族の災因論』岩波書店。
- Robarcheck, C. A., 1977. *Semai Nonviolence: A Systems Approach to Understanding*. Unpublished Ph. D. dissertation, University of California, Riverside.
- Roseman, M., 1991. *Healing Sounds from the Malaysian*
- Adelaar, K. A., 1995. 'Problems of Defininess and Ergativity in Embaloh' *Oceanic Linguistics* 34 (2): 375-409.
- Bernstein, J. H., 1991. *Taman Ethnomedicine: the Social Organization of Sickness and Medical Knowledge in the Upper Kapuas*. Unpublished Ph. D dissertation, University of California at Berkeley.
- Dentan, R. K., 1968. *The Semai: A Nonviolent People of Malaya*. New York: Holt, Rinehart and Winston Inc.
- Evans, I. H. N., 1923. *Studies in Religion, Folklore, & Custom in British North Borneo and the Malay Peninsula*. University Press.

Rainforest: Temiar Music and Medicine. University of California Press.

Tsing, A. L., 1993. In the Realm of the Diamond Queen. Princeton University Press.

内堀基光、一九九六、『森の食べ方』東京大学出版会。

付記：この論考の基礎となった調査は、インドネシア科学院 (Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia) の許可、タ

ンジャンプラ大学 (Universitas Tanjungpura) の協力を得て、インドネシア石油教育交流財団、大和銀行アジア・オセアニア財団、一橋大学如水会ならびに明治産業株式会社からの資金援助を受けて、一九九四年一月から一九九五年十二月の間に行なわれた。この場を借りて関係諸機関、関係諸財団に謝意を表します。

(一橋大学大学院博士課程)